

糖尿病治療の最前線

頑固な性格は 治療のマイナスになる

自分のスタイルを貫いて失明を招いたWさんのケース



担当医 久保 明先生
医学博士
糖尿病内分泌専門医
東海大学医学部
抗加齢ドック教授

患者氏名	W・T様	年齢	36歳	性別	男性	現病歴	糖尿病・増殖性網膜症
------	------	----	-----	----	----	-----	------------

10 代後半で糖尿病を発症したWさんが、私のところに来られたのは17歳のときでした。以来、かれこれ20年近く診させていただいています。かなり若い時期での発症ですが、当時1型か2型の区別はつきにくく、お薬のみの治療で現在に至っています。

Wさんは若い頃サッカーをしていたこともあり、ご自分の体に妙な自信があるようです。実際、ヘモグロビンA1cが8〜9%と高くても、ジムなどでトレーニングすると7%前後に落ち着きます。しかし、多忙で運動ができないと、また数値が上がる。ここ十数年、その繰り返しでした。

また、独身の一人住まいゆえ外食が多く、1日1800〜2000kcalのカロリー制限はできていません。運動でコントロールするというスタイルを、頑なに貫いておられるのです。

このままではいつ合併症を起こしてもおかしくないと、何度となくイ

ンスリン治療をおすすめしてきました。でも、ご本人は「やらない」と拒まれる。実はWさんのお母さんも糖尿病でインスリン治療をされており、それを見ているためか「あんな不便なことはいらない」とおっしゃるのです。

ところが2年ほど前から網膜症による視力の低下がみられ、眼科での入院治療の甲斐なく、左目の視力がほとんどなくなってしまうのです。運動も思うようにできなくなり、ヘモグロビンA1cは9%台にまで上がりました。さすがにご本人も、インスリン治療の必要性を感じざるを得なくなったようです。

現在、Wさんは再び眼科に入院されています。「退院したら今度こそインスリン治療を始めようね」と送り出しました。これ以上重篤なことになるにいたために、今度こそインスリン治療に踏み切ってほしいと願うばかりです。